大鳥蘭三郎先生の御経歴

慶應義塾大学医史学研究室　大村敏郎

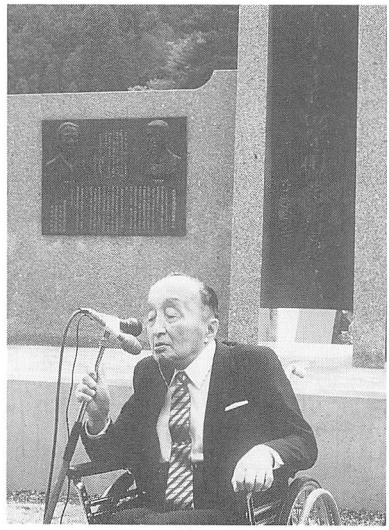
一九〇八年三月三日、オランダのハーグ市ウィルヘルミナ通り八番地の日本公使館で誕生。父は外交官の大鳥富士太郎様、母はよし様、祖父は明治の元勲の一人大鳥圭介であることはよく知られている。この誕生に、わが国の医学教育の歴史に名を残すポンペ・ファン・メールデルフォールト（一八二九～一九〇八）が立ち会ったことは、後に医史学に進まれる先生にとって不思議な因縁である。

一年半後に、日本へ帰国。幼稚舎・普通部・大学医学部と一貫して慶應義塾に学ぶ。一九三二年医学部卒業後、臨床医の道には進まず、藤浪剛一教授の理学的診療科（今日の放射線科）に助手として入局、医学の歴史の研究に取り組まれた。

『我国医学に使用せらるる解剖学語彙の研究』（中外医事新報、一九三二年～一九三三年にかけて五回連載）が処女論文である。さらに研究テーマは『支那における西洋医学の研究』を経て、共著『シーボルト研究』（一九三八年）に至る。ドイツから一年間だけ借り受けたシーボルトの資料を東大の図書館に通って研究した成果であった。

終戦を迎えた一九四五年八月、慶應義塾大学医史学講師に就任、以後三十八年間一人で医史学講義を支えて来られた。その間に、一九六〇年に医学博士取得、一九六六年に教授に就任、北里記念図書館入り口左横の教授室に入られた。

研究の方ではオランダ生れという思いと独習されたオランダ語を駆使して、日蘭交流史研究会に参加、『日蘭医学交流



日本医史学会理事長時代、「本邦帝王切開発祥の地記念碑除幕式で挨拶される大鳥蘭三郎先生（1987年6月）

史』（一九五八年）『蘭館日誌の医学史的研究』（一九六二年）を発表、これが先生のライフ・ワークになり、日本医師会最高優功賞（一九六二年）の第一号、慶應義塾賞（一九六六年）、第二〇回の野口英世記念医学賞（一九七六年）、オランダ政府からのオランエ・ナッソー勲章（一九七七年）の栄誉に輝いたのである。学会会長としては第六三回と第八〇回の日本医史学会（一九六二年と一九七九年）、第十四回蘭学資料研究会（一九七二年）を主催された。

一九六九年オランダにおける日蘭交渉史シンポジウムに参加した際に生地を訪ね、大いに感慨に耽られたと伺ったことがある。

一九七三年に定年を迎えられた後も客員教授として慶應の講義を担当され、一九七四年からは東海大学医療技術短期大学の教授を勤められた。同年十一月癌のため慶應病院に入院され、胃全摘の手術を受けている。一九七五年『近世医学史から』を出版。その後腸閉塞で度々入院されたが、その都度保存的に回復。一九八三年迄講義を続けられた。

一九八二年、先生の研究生活五十年を祝って先生の主な論文四編を含む、百人近い友人や弟子たちの寄せ書きで作った『半生の思い出』という書物がある。先生の真面目さとスマートさとやんちゃな面が見事に描かれていて、弓道部との深い関係やスポーツ観戦好き・音楽ではクラシックファンなど医史学者大鳥蘭三郎先生の意外な面が見える。

日本医史学会の理事長に就任されたのは一九八四年のことで、車椅子の理事長であった。私の記憶では一九八七年六月の「本邦帝王切開発祥の地」の記念碑除幕式に埼玉の飯能市に出掛けられて挨拶されたのが対外的な公式行事に出られた最後であろう。その後足腰が弱られ、十年近い入院生活が続いた。網代の温泉病院、渋谷の老人病院、松戸の国立

療養所、横浜の病院などを巡られた。一九九一年理事長を退かれ、日本医史学会名誉会長に就任された。

最後の四年間は宇都宮にある気心の知れた弓道部の弟子の医院に入院して、奥様なを夫人に見守られて、心置きなく幸せな晩年を過ごされた。

本年三月、米寿のお祝いを喜んで受けられた後、五月に呼吸不全を起こし、主治医の努力で一月頑張って居られたが、一九九六年六月八日午後九時五分天寿を全うされた。

今は青山墓地の大鳥家の墓所に眠って居られる。